

イザベラ・バード

―埋もれていた史上屈指の女性旅行家と同志社との関わり―

金坂 清則

(京都大学教授)

草創期の同志社とイザベラ・バード

1878 (明治11) 年10月と言えば、同志社英学校の開校から4年、相国寺門前の現校地での校舎新築から2年。同志社女学校の開設から1年半、さらに現校地でのその校舎新築からだとわずかひと月半―様々な問題や課題を抱える中で歩み出していた同志社の草創期である。旧都の象徴たる御所―禁裏の北側に全く新しい都市景観が誕生し、旧都に近代化と西洋文明を確実に刻印した時代でもあった。



日本の旅から最も近い時期のイザベラ・バード〈日本では彼女とその日本の旅は左下の姿でイメージされている。訳本の冒頭をこの写真の全身像が飾るために〉

その10月の29日、一人の英国人女性がこの同志社の創立者新島襄の自宅を訪問した。しかも、たまたまの訪問ではなかった。アメリカン・ボードや同志社との様々な関わりの中で京都を半月にわたって旅する中での訪問だった。女性の名はイザベラ・バード。ヴィクトリア時代を代表する史上屈指の女性旅行家である。

知られなかった京都の旅とその重要性

こう記すと、彼女の日本の旅について耳にしたり、平凡社から出ている『日本奥地紀行』を読んだことのある人は驚くに違いない。本書では新島家訪問について知り得ないからである。この本は原著 *Unbeaten Tracks in Japan* のうち分量が完全版(二巻本)の半分もない縮約版を底本とするため、京都や伊勢神宮への旅の部分が欠けているのである。バードについて書いている人の中にさえ、この事実を知らず彼女の日本の旅が北海道への旅だけからなると思っている人がいる。

こんなわけで、京都に関する書物や論文が無数にある中でバードを扱ったものは皆無に等しい。同志社や新島に関する

これまた多数の日本の文献についてみても事情は同じ。彼女が新島の話として正確に記した一言 (Vol. II, p.233) に関して、恩人セイヴォーリーに釈明する新島の手紙が『新島襄全集六』に収められているものの、先日出た『アメリカン・ボード宣教師』(同志社大学人文科学研究所研究叢書XXXX) 所収の本井康博論文などがほとんど唯一の例外である。

ところが、半月に及んだ明治11年秋の京都滞在中の彼女の行動や、京都を含む畿内と伊勢神宮への旅は、彼女の日本の旅や旅人としてのバードを理解する上で欠かせない。京都・神戸その他での宣教師の活動の見聞や伊勢神宮訪問等、宗教的事象への関心が彼女の日本の旅の動機の一つとしてあったことも見落とせない。日本の歴史の一大転換期だったこの時代に、伝統日本の核心地京都にキリスト教主義の学校が開かれた意味も大きい。しかも彼女の京都の旅にとって同志社は不可欠である。本井康博教授が指摘するように不正確な点も散見されるが、それ以上に詳細な記述を通して初めてわかる事柄が多い。少なくとも、臨場感に

溢れ当時の様子が蘇るように感じられる点で独自の価値をもつ。さらに、本井教授が紹介しているが、新島に関わるバードの記述を評価するアメリカ人が新島を知る人の中に出版当時いたという事実もある。

半月の宿同志社女学校と山本佐久

彼女は半月の宿を NIJYOSAN YASHIKI と記す。これは真新しい同志社女学校だった。こう記したのは、学校が建てられ



バードが泊まった同志社女学校 (『同志社女子部百年史』)

た敷地が公爵二条家の地所だったからである。『日本奥地紀行』の省略部分を訳した『バード日本紀行』の訳者が二条山屋敷と表記し、SANに山の字を充てるのは全くの誤りで、京都人



バードが授業参観した同志社英学校の校舎『新島襄—その時代と生涯』

ただ、この名所巡りは「山々に囲まれた美しい都市」京都という贅辞や紅葉の描写に結びつくけれども、旅行記の記述にのみ限り、彼女のより強い関心は違うところにあった。名所についてはその名を含めほとんど全く記していない。京都を日本一

の観光都市にしてきた日本人の、社寺を巡って祈ると同時に解放感・歴史・建物・自然・美観を味わったり賑わいを楽しむ物見遊山の関心とは異なるものだった。一言で言えば彼女の関心は、近代化・西洋化という形の変革が起こりつつある旧京都の教育・文化・宗教・産業の諸相、とりわけ種々の新しい動きの一部としてのキリスト教主義学校教育の現状とそれを担う宣教師の活動を調べ、読者に伝えることにあつたと考えられるのである。京都の記述は、実はきわめて現実的な局面的視察的報告として読むとよく理解できるものである。

同志社をめぐるバードの「旅」



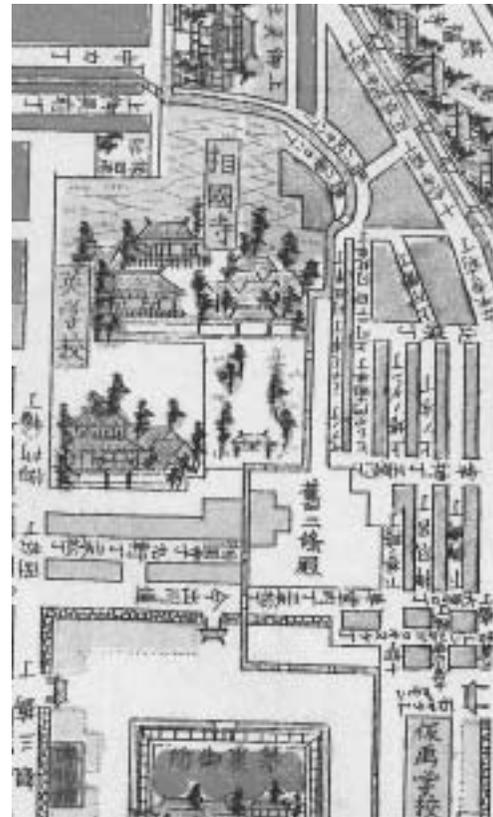
バードが出会ったであろう英学校の生徒（『新島襄—その時代と生涯』）
バード来訪のまさに1年前のこの写真には、校長新島や、バードが名は記さないながら言及した本間重慶（4列目の左から3人目）も写っている。なお、本間はバードの来訪時には修了していた

——女将とは宿屋の女主人のことである。佐久なればこそ、バードを世話し、「大変多くの名所」に案内した。時は10月下旬。紅葉の頃である。

物見遊山的でなかった京都への関心

が八坂神社を八坂さんと呼ぶように、人以外に対してさえ用いるさんであると同様に、日本人、特に女性を「○○さん」と呼んでいた在目欧米人の呼び方によるものだった。二条さまのお屋敷が二条さん屋敷と呼ばれていたのをそのまま記したのである。

また、同志社大学・同志社女子大学・同志社女子中高や新島襄関係の書物での従来の説明からは、二条家の敷地をすべて購入したかのように思われるがそうではなく、購入時に二条関白御殿が取り壊されたわけでもない。存続していたことを当時の写真は物語る。ただこの御殿に彼女が泊まったわけではない。アメリカン・ポードによる女子のミッションスクールだったとも記しているし、和洋折衷の大変大きな建物であり障子でなくガラス



「二条さん屋敷」と同志社英学校を示す絵図
(明治16年「改正再刻京都区組分細図」)



バードを世話した新島襄・八重夫妻や八重の母山本佐久
(同志社社史資料センター蔵。夫妻の結婚間もない頃)

ス戸がはめられ、雨戸はついていないという記述は、写真が示す学校の構造そのものである。バードはその一階にあつた来客用寝室に泊まり、二週間を快適に過ごしたのである。

したがって、ここで彼女の世話をした女性とは女学校の舎監をしていた山本佐久つまり山本覚馬・八重兄妹の母、すなわち新島襄の義母だった。「バード日本紀行」が充てる「おかみ」という訳語では、バードの旅は正しく理解できない

の英国留学経験を持ち、宗門教育を初めとする仏教改革に取り組む気鋭の僧侶赤松連乗（赤松）に会って、仏教・キリスト教・神道を巡る宗教談義を行っている。英学校が認可された当時、僧侶・神官や住民が反発した中で、特に激しく抗議したのが本願寺派だったから、彼女は反キリスト教勢力の牙城に入り込んで、その理論的支柱たる人物と「歓談」し、その足で新島を訪ねたのである。何という精力的な行動であろう。

しかも、具体的な紹介は省くが、赤松との対談の内容は、彼女が書き残しているところによると大変高度にして論争的であり、かつ、一体どうしてこれだけ詳細な記述を行えたのかと思ってしまうほどの記述を残せるに足る内容のある対談だったのである。疲れていなかったはずはない。にもかかわらず、彼女は赤松との対談が楽しかったと言っている。そして、その帰路に行った新島邸訪問に関しても、対談の内容にとどまらない多面的で詳しい記述を残している。これだけの記述を残せるだけの能力を持っていたことには驚くほかない。1878年10月29

日の「旅」は、距離はわずかだが、彼女が並はずれた旅人であったことの一端を窺えるものだったのである。逆に言えば、この日の「旅」は旅人としての彼女のパワーをそこまで引き出すような、充実したものだつたのである。彼女の記述に不正確な点があることを弁護するわけではなく、本井教授の行ったような資料批判を通して、初めて彼女の旅行記が歴史資料としても活用できることについては私も指摘してきているが、ここでは、不正確な記述が生まれた背景にこのようなハードな旅という事情もあつたことを確認しておきたい。

では、このような何日にも及ぶ旅の成果としての記述を、彼女は同志社や新島についてどのように行ったのだろうか。次に、この点についてみておこう。

同志社・伝道活動と新島に関わる記述

これに関するバードの記述はよく考えられている。

彼女は、はじめに自分が滞在している所の様子を記している。場所や建物の構造（上述）と校長である女性宣教師スタ



保存修景された新島襄旧邸（筆者撮影）

とによって、本稿中に掲げた当時の写真や地図には一層生命が吹き込まれ、鮮やかに迫ってくるものになる。

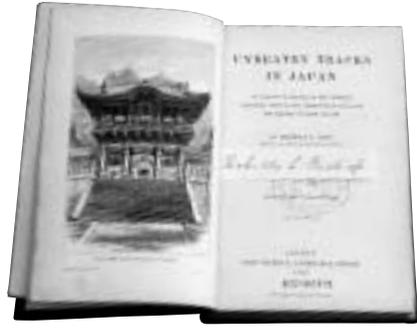
このように、自分が滞在する場所についての記述で始めたバードは、次に、居留地外の都市での伝道活動という点で京都の伝道活動が興味深いことや、それに関わって生じる課題について述べ、女学校と英学校の両方に跨がる話にもついでく。ここで英学校のデイヴィス、ラーネツドと女学校のスタークウェザーという3人の宣教師の名が出る。そして次に、英学校が日本における伝道活動について語る上で最も興味深いものになるとの位置づけの下で、この学校がどのような経緯で設立されたのかについて説明する。事実誤認に基づく記述が若干みられるものの、このような記述を踏まえた上で、授業の実態の観察に基づく記述に移っていく、詳細で臨場感に満ちた記述を行うという記述の論理構成自体は、実に自然である。「バード 日本紀行」を読んで、このことが感じられないのは、府知事と訳すべきところを存在したはずもない市長と誤ったり、熊本バンドや新島襄の

ような不可欠な訳注を付けなかったり、同志社のことを日本の会社と訳したり、英学校の敷地についての確な訳注を施していないためにすぎない。このためにバードがどのような筋道を立てて何を言おうとしているのか、英学校の校舎新設がどのようにして成ったのが、リアリティーをもつて伝わってこなくなっているのである。

私たちはバードの率直な記述によって、デイヴィスやラーネツドをこれまでよりも身近な存在としてイメージできる。また、大変な熱意を以て授業に取り組む、バードからみても答えるのが難しいような質問をする学生の姿と、そのような彼らに感嘆している、バードの様子や、どのような授業がどのように行われていたかを、そこに居合わせるかのようイメージできる。彼女の訪問に近い時期の校舎やそこで学んだり教えたりした人の写真を見ながら、彼女の記述を読むことによって127年前の授業風景が蘇ってきそうになる。また、彼女の記述から聖書や神学に関する授業が新設校舎で行われていた可能性が窺える意味は大きい。

い。学生が日本の国民教会の設立を望んでいることを彼らとの話からバードが感じ取ったり、キリスト教の上流階級への普及にバードが強い関心を抱き、青年がその鍵を握ると考えていることも興味深い。

他方、新島邸訪問の折の記述に関して言えば、新島から聞き出した様々なことを記す前に、応接間での椅子に座つての談話であつたことや、西洋風のお茶と夕食をご馳走になつたこと、新島が洋装、八重が和装という我々がよく知っている服装であつたこと、その服装を似合っていると感じたこと、さらには応接間のインテリアの飾り方は英国と違うが、書斎の様子は変わらなかつたようなことを適切に記していて、読者をしてそこに居合わせるかのような気持ちにさせてくれる点は、やはり評価すべきであろう。新島の人柄についての率直な記載も興味をそそる。彼女には、彼女よりひとまわり年下の新島は、何よりも紳士であり、もの静かで、気さくで、礼儀正しい人と映り、また温情に溢れ、学識豊かなキリスト教徒であり、大変愛国心の強い日本



2004年に同志社大学に収蔵されたUnbeaten Tracks in Japan (バードのサインが記された紙片が挟み込まれている)

人であると感じられたという。
イザベラ・バードと同志社の関わりはほんの2週間ほどのことにすぎない。そして一過性の訪問者であったが故に、同志社の歴史の中に登場することはなかった。しかし、非キリスト教世界特にアジアにおけるキリスト教伝道活動への彼女の関心の持続と、同志社誕生の経緯からすると、彼女が最初のアジアの旅で、キリスト教伝道活動の最も注目すべきものとして同志社に注目したことは記憶に止

められてよい。また京都の旅が、そして関西・伊勢神宮の旅までもが、同志社の設立と関わるアメリカン・ボードの人々の支援の上に成り立つものであった事実も忘れてはならない。彼女の旅は様々な「人の繋がりの連鎖」という視点を抜きにしては語れない。同志社をめぐる旅は、実は、このような彼女の旅の特質の典型だったのである。同ボードのO・H・ギューリック夫妻や、野口富蔵という興味深い人物であることを発見できたMr. Nouguchiの名を出さぬままに本稿を終える私は、改めてその思いを強くする。

付記 バードの旅と旅行記についての新しい見解についてはイザベラ・バード著・金坂清則訳『中国奥地紀行2』（平凡社、東洋文庫）の「解説」に記しているので参照いただければ幸いである。また、バードの没後百年に当たる年に本稿執筆の機会を与えられたことは、若かりし頃、同志社香里中学校の非常勤講師を勤め、請われて高校地歴部の合宿調査で中村文雄先生や今は亡き木曾良和君ほか素晴らしい生徒諸君と五島列島にまで出かけた私にとって望外の喜びである。同志社大学にあっても体育会委員長を務め、『同志社創立一〇〇周年体育会記

念写真集 同志社スポーツ一〇〇年の歩み」という誠に立派な書物を編集委員長としてまとめ上げた同君に「人の繋がりの連鎖」にまつわる本稿を捧げさせていたきたい。また、今秋、エディンバラで開かれる私の写真展（イザベラ・バードの旅の世界の今）の折には、「127年前の旅が機縁になり『同志社人物誌』に名を連ねることになりましたよ」と、バードの墓前に報告しようと思う。

イザベラ・ルーシー・バード (Isabella L. Bird) 1831.10.15 ~ 1904.10.7

イングランド北部の町バラブリッジに牧師の子として誕生。生来病弱で22歳の時に医師の勧めでアメリカ・カナダを訪れて以後、69歳まで半世紀近く世界を旅した。

1878年の半年間の日本の旅の記録（妹への手紙）は1880年に出版されベストセラーとなった。彼女の旅は49歳からの夫との生活が夫の病没で5年で終わって以後、一層激しさを増した。その旅が評価され、1892年には女性初の王立地理学協会特別会員に選出された。